
「ヒトと野生動物たち、一緒に未来へ。」

-Part 1-

WILDLIFE PHOTOGRAPHER

山田 耕熙

2020年11月



IWC
SCHAFFHAUSEN



遠くて近いガラパゴス

2015年6月にIWCが企画したイベントに参加し、初めてガラパゴス諸島の島々を訪れた。チャールズダーウィン研究所では鳥類や爬虫類のみならず、昆虫に至るまで、各島の年代毎に無数の種類の生き物の標本がなされていたことを覚えている。

時間と環境変化の中における種の変化が記録されていたのだが、1960年代の記録開始以降で見ても、実に多くの種が既に絶滅してしまっていることを知った。

一つの種が途絶えることが如何に他の種の生き物に甚大な影響を与えるか？

私たちの想像をはるかに超えた絶妙なバランスで成り立っている生態系の神秘に衝撃を受けたことを覚えている。そのような中、最もショックであったのは、ガラパゴスのアイ

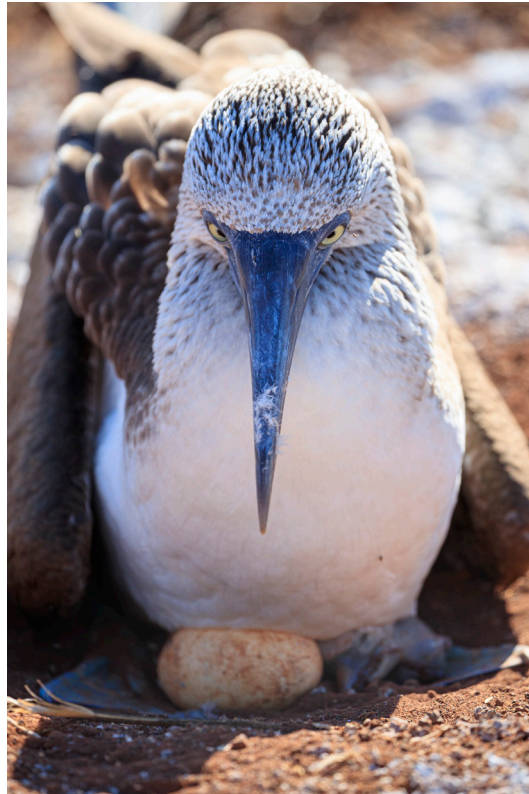
コンともいうべきゾウガメ達が、ガラパゴスの外からやってきたヒトの手によって乱獲され、絶滅寸前にまで追いやられたという過去について聞かされた時だった。

というのも、ガラパゴスというと、私にとっては、隔絶された孤島というイメージがあり、ヒトの手からは遠く離れた世界にあるものだと思い込んでいたからだ。しかし実際はその真逆で、人間社会の影響をまともに受けてきた島だったのだ。現在のガラパゴス諸島にはヒトが住む島があり（約3.5万人居住）、そこには空港も道路もあり、既に完全に一つの町となっている。

歴史の中で、ある時代から人間とは切っても切れない関係を構築され、生き物たちはその中で、それまで繰り返されてきた自然淘汰とは全く違う要因で絶滅の危機に追いやられてきたという事実を知った。

ゾウガメは直接的にヒトの手によって命を奪われたというその顕著な例であるが、他にも、過去に人間が持ち込んだ外来種が今も継続してガラパゴスの生態系を脅かす問題となっていることや、現在ではエルニーニョ現象や温暖化が加速度的に深刻な事態を引き起こしていることなどを知った。例えば、いくつかの種類のダーウィンフィンチ（鳥類）は、外来

種のネズミに卵を食べられ、数が激減していること。エルニーニョの影響で大雨となり、ゾウガメの卵が腐ってしまうこと。固有種であるウミイグアナの主食となる海藻は温暖化によって減少していること。青アシカツオドリの餌であるイワシの減少で、生息数が過去の記録の半分近くまで減少していることなど、様々な話を現地で伺ったのを覚えている。



そして2度目の2019年5月に自身で再訪した際は、海の中のプラスチックゴミの問題が如何に深刻であるかなどを現地で実際に話を聞いて学んだ。例えば海鳥の雛の子供の胃袋の中は、驚くほどのマイクロプラスチックで埋められている現実がある。しかもこれらは殆どがその場で投棄されたものではなく、世界中から流れ着いたものなのだ。

このことにもまた大きなショックを受けた。例えば自分が遠く日本の地で、何気なく捨てたプラスチックゴミが、時間を経てガラパゴスの海鳥を窒息死させるという事実を容易に想像できるだろうか？

しかも海中を漂うプラスチックはやがてマイクロプラスチックとなり、魚の体内に入り、最終的にそれは人体に入ることになるのだ。これは人間を含めた多くの生態系にとって早急に改善しなくてはならない問題となっている。

（プラスチックが多く使用されるようになった1950年以降、世界が2020年までの約70年間に生み出しているプラスチックの総量はおよそ92億トンになるという。これは、分かりやすく言えばギザの大ピラミッド1600個分の量に相当する。そしてこれらは例えゴミとなったとしても、自然消滅することは決してないため、結局はこのほぼ全ての量が形を変えて地球上のどこかに存在することになるのだ。）

他にも、驚くほど規模の大きな密漁が行われている事実を聞いたことにも衝撃を受けた。特にアジア向けのフカヒレ調達のため、世界で最もサメの集まるガラパゴスの海域をターゲットにアジア船籍等が遠路押し寄せ、密漁を日々横行している。彼らは一隻で数千匹から一万匹近い量ものサメを密漁していくという。そして、それらの中には絶滅危惧種のアカシユモクザメなども多く含まれてしまっているのだ。

人間の消費活動は生態系にとって極めて重要なバランスや環境を破壊し、気候変動までも引き起こしている。

その影響でゾウガメ、ウミガメ、ガラパゴスペンギン、海イグアナ、陸イグアナ、ガラパゴスアシカ、青アシカツオドリなど、固有種を含めたいくつもの生物の存在が危機に晒されていることを学んだ。

ガラパゴスはもはや遠く離れた孤島などではなく、我々ヒトの日常生活に密接に関わる場所となっていることを改めて痛感した。



しかし一方で、透き通った海を見て、アシカや魚達と一緒に泳ぎ、イルカの群れを目の当たりにし、海鳥達とともに船を進める旅は、私に、生き物で溢れる素敵な世界、躍動感ある命、逞しく生き抜く力という部分も感じさせてくれた。

人間の行動には憤りを感じるが、美しいたくさんの命が生きることの出来る環境が、少しでも長く保たれて欲しい、そのた

めに自分が出来ることをしてみたい、しなくてはならないという率直な想いを同時に持ったことを覚えている。

私は写真家として、ここ数年、インドのランタンボール国立公園で野生の虎の家族をメインに撮影をしているのだが、自分がテーマとしている”野生の虎の保護”に繋がる活動の想いの根底には、ガラパゴスでの体験が影響しているのだと思う。



虎との出会いが生んだもの

私が実際に野生の動物や自然に対する保護の必要性について真剣に考え出し、自分に出来ることの具体的なイメージを持ちはじめたのは、インドのランタンボール国立公園を訪れた時だった。

2017年、初めて自分の目で野生のロイヤルベンガルタイガーを見た。ファインダー越しに見つけた虎の迫力は想像を超越しており、私はあまりの緊張に手が震え、凄まじい心臓の高鳴りを感じたことを覚えている。そして距離は十分あったにも拘わらず、ファインダー内でこちらに向かってくる虎との距離感がわからなくなり、恐怖で思わずカメラを降ろしてしまったのだ。

あれから、これまでに何度も野生の虎を撮影してきたが、現れた瞬間に見る者すべてに緊張感を与えるあの圧倒的な存在感はいつになっても感じる。

森の王者である虎。

その悠々とした振る舞い、獲物を追い詰める迫力と力強さ、

時おり見せる猫のような愛くるしい仕草や表情、そして親子が魅せる濃密な愛情の時間に、私は完全に心を奪われた。自分が虎を初めて見たタイミングが、自分の人生でとても辛い経験をしていた時期と重なったことも相まって、ただでさえ生き抜くことが困難な状況が存在する中を、虎達が懸命に逞しく生きる姿に心から感動したのだ。辛い時期に私のことを前へと向かせてくれた虎という存在に私は感謝している。そしてその感謝の気持ちから、虎達に対して自分ができることをやろうと決めたのだ。

だからこそ野生の虎が置かれている今の状況やランタンボール国立公園を含めたこれまでの歴史等に興味をもち、現地の人の生の声を直接聴いて学んできた。

そこには野生の虎を保護する活動に人生を捧げている人、それを支援する人がたくさんいた。私は彼らの活動、虎に対する愛情の奥深さにとても刺激を受けたし、この出会いは正に今の自分の生き方にまで影響をしている。全ては虎との出会いが生んでくれたものだ。



森の生態系の頂点にいる虎。

自然界では彼らを捕食するものなど存在しないはずが、現状は深刻な絶滅の危機に追い込まれている。森林伐採による生息地の減少と密猟（骨を漢方薬へ利用したり、毛皮や牙などを宝飾品とする目的で、アジアにおける闇市場取引が深刻である）が主な原因だ。つまり人間の手によって殺されてきたのだ。

それだけでも充分すぎるほどに深刻な問題なのだが、更に別の問題として、世界で最も多く野生の虎が棲息するインドでは、人口増加により、人間が生活する一部のエリアが虎の

棲息するエリアと重複してしまっている点も存在する。当然、住民の財産である家畜が襲われたり、人間自体が襲われたりすることも起きるため、住民と虎との間には大きな軋轢が存在している。

インドにおける法律上、虎は一定の保護の下にある国獣であることは間違いないのだが、他方で害獣扱いされている生き物でもある。つまり現実には、この先の人間の決定次第で状況が激変する可能性を孕んだ、とても複雑な立場にいる生き物なのだ。



冬の早朝、湖を渡る雄の虎。

薄暗く静かで深い水の中を進むその姿は、まるで、野生の虎という存在が生きる厳しい現状を現しているように感じる。

わずか100年前、地球上には野生の虎がおよそ10万頭存在したという。しかし、現在その数はわずか3000頭余りである。実に約97%が死滅したのだ。現存する個体数のうち、約7割がインドに存在し、約40カ所ある国立公園に棲息している。私の通うランタンボール国立公園はその中でも最も早期である1973年より保護区として指定されている。

総面積は1400km²メートル程（東京23区の約2倍の面積）であるが、それでも野生の虎はたったの70頭程しか存在し

ない。何故ならば、虎1頭あたりが必要とするテリトリーはメスの場合20～30km²、オスに至っては60～100km²と大変な広範囲に及び、既に保護区の面積に対する頭数のキャパシティが限界に達しているからなのだ。つまり、例え繁殖出来たとしても今度は虎同士のテリトリー争いが激化する。

人間との衝突という問題以外にも野生の虎の保護活動が抱えるジレンマが存在する。



生後3ヶ月の子供とその母親。まだ日が昇らない薄明かりの中、子供に愛情を注ぐその姿に深い愛を感じた。貴重な命が育つためには森の維持が欠かせない。



村人の飼う牛を襲い食っていた。それは人間の生活エリアと野生の虎の棲息エリアが如何に近接しているかを意味する。

IWC
SCHAFFHAUSEN



ワイルドライフと人間が共存するための手段

ワイルドライフに触れるツーリズムという手段

人間と動物の住む世界が完全に切り離され、人間社会の影響が動物に全く及ばないように出来るのであれば、それはまさに理想だが、現実にはありえない。水も空気も大地も繋がっているのだ。切り分けるのではなく、共存するための手段を見出すべきだ。

ワイルドライフに触れるツーリズム^{*1}。

^{*1} 私が言うツーリズムとは、あくまでワイルドライフを見にいくためのツーリズムであり、同じ動物でも、鎖で繋がれた若しくは閉じ込められた施設はもちろんのこと、動物を飼育下に置き“動物と触れ合うための観光施設”を営んでいる場所へのツーリズムは含まない。

ワイルドライフと人間との共存を見出すためには、それは非常に有効的な手段となりうると考えている。

もちろん、どうしてもツーリズム自体の導入には共存とは矛盾するプロセスも発生するし、発展のプロセスからも派生する問題は当然にあるのだが、

生き物を取り巻く環境が法とともに整備されることを前提に、必要な制限をかけながらも、制度として動かす仕組みをセットにして、その手段を最大限に使っていくことが、現代においては最もワイルドライフを保つ近道だと感じる。

何故ならば人口激増・資源争奪の現代において、経済発展こそが何よりも最優先事項であることは全世界中の国にとって共通の宿命となっているからだ。

これまで世界中で、人が使っていないエリアにどんな生き物がいると、どれだけ貴重な生態系であろうと、必ず、「そこは金を生める場所か否か？」若しくは、「その生き物は金に変えられるのか？」という判断が下されてきた。そうやってかけがえのない命は際限なく失われてきた。



しかし、もしもその場所に、先に大きな経済効果を伴ったツーリズムが存在し、世界中の人が訪れ、その国の重要な観光資源として動植物達が位置付けられていたら、どうだろうか？現地にお金落ち、現地の人間がナチュラリスト、ガイド、ドライバー、レンジャー、フォレストデパートメントのような管理局員、ホテルスタッフとして雇用され、そこには一定の物の流れと消費が生まれることになる。つまりはヒト・モノ・カネが循環する仕組みが成立するということになる。現地が潤い、また動植物達の環境整備にも繋がるというグッドスパイラルが生まれるのだ。

そうなれば、管理・監視のシステムや目も生まれ、破壊行為や密猟に対抗する手段ともなりうるだろう。反対に、経済効果を持つツーリズムがなく、そこで雇用される人、利益を得る人がいなければ、開発に対する反体勢力などは所詮小さいものとしかなり得ないだろう。次第に政治力と開発を行いたい者の資金源を前にあつという間に無抵抗に押しやられる。

現に膨大な生き物が生息していたいくつもの貴重な場所が、とてつもない速さの月日の中で、開発されている。



茂みの中に身を潜ませる虎からは、何かこれ以上彼らに近寄ってはいけないかのような張り詰めた緊張感を感じた。
それはまるで、「私達の森をそっとしておいて欲しい」というメッセージにすら聞こえる気がした。

IWC
SCHAFFHAUSEN

(インドネシアのスマトラ島、ボルネオ島、マレーシアのサラワク州などでの大規模なパームオイルプランテーション開発や熱帯材調達のための伐採、紙・パルプ用の植林地の造成、そしてメコン川一帯の天然ゴム資源のための森林伐採はその良い例だろう。

スマトラ島では過去30年間で森の50%以上が失われ、メコン地域では過去40年間で日本の国土面積の1.4倍以上にあたる森が失われた*。これらの場所では、現在も虎をはじめ、ヒョウやゾウやサイ、オランウータンなど多種多様な生き物たちが絶滅の危機に追いやられている。ちなみに、私たちの国はそれらの地域からきた熱帯材や紙資源、天然ゴムの主要な取引先となっているという悲しい現実がある。またパームオイルは我々の日用品や食品の大部分に使われている。我々の消費活動が需要を作り出し、森林伐採を加速させているという複雑な事情が同時に存在している。我々はこういった事実をきちんと知り、責任ある行動を選んでいかなくてはならないのだ。)

動植物達が観光資源として位置付けられ、一定のビジネスとして資金が回る仕組みを成立させることが、ワイルドライフが保たれるためには何よりも大事になると考えている。悲しいことだが、現代においてはツーリズムがない場所ではワイルドライフは保たれない。

私は、野生の虎が絶滅寸前の危機に追いやられてきた原因と今の置かれている状況、ガラパゴス諸島の動物たちが辿ってきた歴史の一部と今の状況に触れてきたからこそ、それを確信している。

Part2へ続く。

*2 出典

<https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/42.html>

<https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/320.html>



インドの国立公園で行われているサファリツアーでは、野生の虎との距離をしっかりと保ちながら、じっくりと観察することが出来る。

「ヒトと野生動物たち、一緒に未来へ。」

-Part 1-

PROFILE OF KŌKI YAMADA

1979年生まれ。東京在住。

旅先で綺麗な写真を撮りたいと思い、2012年頃からカメラに興味を持つようになる。

ある日、BBC Earthのドキュメンタリー番組に圧倒的な衝撃を受け、地球上にある「人間の想像をはるかに超越した世界」に関心を抱く。

それをきっかけに、実際に極地や僻地に行き、自分自身の目で物事を捉えてくることに意味を感じるようになる。

これまで南極、北極、アラスカ、インド、アフリカ、ガラパゴス諸島などへ旅し、さまざまな生き物を撮影。中でも、インドのランタンボール国立公園に生息するロイヤルベンガルタイガーの虜となり、この数年追い続けている。

厳しい環境をその身一つで立ち向かう生き物たちの逞しさ、そして儚く美しい姿、自分が感じたそんな瞬間を、写真を通じて伝えていきたいと思い活動している。

AWARDS

2020年 第8回日経ナショナルジオグラフィック写真賞ネイチャー部門最優秀賞受賞

2018年 第52回キヤノンフォトコンテスト風景部門ブロンズ賞受賞

EXHIBITIONS

2019年4月 富士フィルムフォトサロン東京（東京ミッドタウン六本木）にて、初の個展「ロイヤルベンガルタイガー -フラジャイルな存在-」を開催。

1週間で1万人以上が来場した。

以後、全国3都市大阪・福岡・名古屋にて巡回展を行った。

ATELIER

2021年3月 東京代官山ヒルサイドテラスに自身の写真アトリエ「Atelier Rantham」を開く

「Atelier Rantham」

〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町29-18ヒルサイドテラスA2

E-mail info@kokiyamada.jp

HP <https://kokiyamada.jp>

Instagram https://www.instagram.com/koki_yamada_photography/